

機関番号：84603

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2008～2010

課題番号：20242004

研究課題名(和文) 奈良時代の仏教美術と東アジアの文化交流

研究課題名(英文) The Buddhist Art of the Nara Period and the Cultural Exchange
in the East Asia

研究代表者 湯山 賢一 (YUYAMA KENICHI)

独立行政法人国立文化財機構・奈良国立博物館・館長

研究者番号：00300690

研究成果の概要(和文)：

「奈良朝仏教美術の主要作例、もしくはその国際性を考える上で重要な周辺作例の中から対象とする文化財を選定し、それらに関する基礎資料を学界の共有財産として提供する」という目的に沿って調査研究を行い、22年度末に5部構成・2分冊からなる研究成果報告書を刊行した。薬師寺に伝来した藤田美術館所蔵大般若経(魚養経)全387巻の撮影及び書誌的データの集成、蛍光X線分析による香取神宮所蔵海獣葡萄鏡や東大寺金堂鎮壇具の成分分析を通じた制作地の特定などが、代表的な成果である。

研究成果の概要(英文)：

The research group of Nara National Museum accomplished the project in concordance with the purpose of contributing related references as common property to the academic world: the masterworks of the Buddhist art in the Nara period, as well as related cultural properties which reflecting importance of the cosmopolitanism. We issued research statements in two volumes consisting of five parts in total, in March 2011. Principal findings of the research include assembling bibliographical data of Mahaprajnaparamita Sutra, so called Gyoyō-kyō in Japanese, which was handed down to the Yakushi-ji temple and currently owned by Fujita Museum of Art, and specifying place of production of the bronze mirror plate with mythical beast and grapevine design owned in the Katori Jingū shrine, analyzing by the fluorescent X-ray spectrometer.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	14,200,000	4,260,000	18,460,000
2009年度	5,000,000	1,500,000	6,500,000
2010年度	8,300,000	2,490,000	10,790,000
年度			
年度			
総計	27,500,000	8,250,000	35,750,000

研究分野：日本史

科研費の分科・細目：美学・美術史

キーワード：仏教美術 奈良時代 東アジア

1. 研究開始当初の背景

奈良時代の仏教美術に関する基本情報としては、昭和40年～50年代に刊行された『奈良六大寺大観』『大和古寺大観』（岩波書店）に収録されたものなどが今なお有用だが、再調査による見直しが迫られているものも少なくない。今日では、従来からよく知られた作品についても、最新の機器を用いた調査などに基づく、新たな基礎資料の整備が急務であるとの認識が学界内で広まり、また古代の美術工芸品を日本国内に限らず、広く東アジア世界の中に位置づけようという機運も高まっている。このような動向の中、奈良国立博物館では近年、(1)平成14年の東大寺戒壇堂四天王像、同18年の法華堂執金剛神像の、高感度媒体を用いたX線透過撮影による内部構造調査。(2)平成12～14年度に行った科研『日本上代における仏像の荘厳』（基盤研究B2）における、聖林寺十一面観音像光背の復原図案作成と東大寺二月堂光背の現状トレース図制作。(3)平成16～18年度に東京文化財研究所と共同で行った、奈良～平安時代を代表する仏画である当館所蔵の十一面観音像（当館）及び薬師寺吉祥天像に対する光学的調査。などを実施し、その成果を書物や報道発表を通して公表してきた。

こうした研究の過程で蓄積した調査方法・資料作成方法に関するノウハウを発展的に継承し、活用しうる次なる重要課題を模索した結果、(1)蛍光X線による成分分析をはじめとする自然科学的調査をより幅広い調査対象にも応用し、これを系統的・組織的に進めて基礎資料の充実を図る。(2)上掲の調査を通し、中国・朝鮮半島・日本のいずれの地で制作されたかについて議論がある重要作例の、国籍問題の解決に資する。などが、実現可能性の高いものとして浮上した。同時に作品から得られた情報から派生する諸問題に対する考察

を、考古学・歴史学など隣接領域にも目を配りつつ、国際的な視野から組織的に展開することで、奈良朝仏教美術工芸史の全体像をとらえ直す契機となりうる重要な成果を提示できると考え、本研究を構想するに至った。

2. 研究の目的

本研究は奈良時代においてわが国で制作された、あるいは中国・朝鮮半島から舶載されたと考えられる仏教関連の美術工芸品、及び奈良時代併行期の東アジアにおける文化交流の様相を考える上で重要な文化財のうち、(1)調査が困難であった、ないし適切な調査方法が確立されていなかったなどの理由から基礎的な調査資料の整備が遅れている。(2)中国・朝鮮半島・日本のいずれの地で制作されたかという国籍問題が未解決である。または従来の説の見直しが求められている。などの課題が今日認められる作品の中から、ジャンル毎に特に重要なものを選定し、実物に即した綿密な調査を行い、様々な角度から検討を加えることによって、今後の議論の基礎となる資料を、学界の共有財産として提供することを、第一の目的として構想された。これと併せ、唐・新羅との活発な交流を通して、空前の規模で国際的な文化状況が現出された奈良時代の特性に鑑み、考古学・歴史学など隣接領域における議論とも関連づけつつ、調査対象とする諸作品の位置を広く東アジア美術工芸史の中で考えることを、第二の目的に掲げた。

3. 研究の方法

本研究は大きく分けて、(1)実作品に即した調査・分析に基づく、基礎的な資料の整備（一次的研究）。(2)これら諸資料を生きた研究材料として活用し、派生する様々な問題に対する考究をとおして、奈良朝美術工芸の全体像を、より広い視野から、より動的に（とも

に東アジア規模で)、より深く精確に把握することを目指す試み(二次的研究)。という二つの側面を備えているが、即物的・作業的性格の強い上掲(1)の研究の効率的な遂行が、本研究全体の成否を左右する最優先課題である点に鑑み、作品のジャンル(彫刻・絵画・書跡・工芸品・考古資料)に応じて編成される五つの班を基本単位として研究体制を整え、調査研究活動を進めた。

3年間の研究期間においては、奈良朝美術工芸で最大のウエイトを占める東大寺所蔵品を皮切りに、(1)蛍光X線分析装置を用いた金工品や絵画の顔料の成分分析などの、自然科学的調査。(2)研究分担者をほぼ総動員して行った、387巻に及ぶ大般若経(藤田美術館蔵)の、全巻に及ぶ書誌的データの収集と写真撮影。など、調査研究対象に選定した文化財それぞれに最も適した方法で、資料の蓄積を進めることに最大の重点をおいた。また期間中に当館で開催した特別展を研究成果公表の場とする一方、出陳作品を対象とした新たな調査研究を立ち上げる場としても活用した。

かくして調査→資料作成・整理というプロセスを繰り返しながら、主として班単位で作品に対する発展的な考察を加えて認識を深化させ、研究期間終了時に刊行した報告書へと、その成果を凝縮していった。

4. 研究成果

3年間にわたって進めてきた調査研究の対象の中から最終的に成果報告の対象としたのは以下の五件(五群)の文化財で、各々美術工芸品の五部門に対応する。それぞれの調査研究の概要は下記の通り。

(1)(彫刻部門)東大寺法華堂乾漆諸像の修理時、非常に色鮮やかな状態の時に撮影された彩色文様写真二千余カットを研究資料として活性化すべく、全点をデジタルデータ化

して処理を加え、撮影部位の確定などを行った。(2)(絵画部門)唐代仏教における瑞像信仰の周辺諸国への波及の様相を伝える重要資料である藤井斉成会有鄰館所蔵『南詔図伝』全巻の、写真撮影と光学的調査を含む調査などを実施した。(3)(書跡部門)奈良朝写経の代表的な一括資料で、薬師寺に伝来した藤田美術館所蔵『大般若経』(魚養経)、全387巻を当館に輸送し、全巻の調査・撮影を完了させた。(4)(工芸品部門)香取神宮所蔵『海獣葡萄鏡』を借用時に光学的調査などを行い、データを活用して正倉院宝物中の同型鏡との関係などの問題を検討した。(5)(考古資料部門)東大寺金堂鎮壇具の全資料を対象として調査研究を進め、高精細画像の撮影、光学的調査、実測などを実施した。

これら基礎資料をとりまとめるとともに、各部門担当者による所見・論考等を付載し、23年度末に5部構成・2分冊からなる研究成果報告書を完成させ、刊行した。その中には非常に重要な作例であるにもかかわらず、写真やごく基本的な情報すら研究者間で共有されていなかった作品に関する資料も多々含まれており、今後の国内外における研究において必ず参照されるであろう、新鮮かつ信頼度の高い基礎資料を提供することができた。藤田美術館所蔵『大般若経』研究における、巻末紙背に付された校生記全ての積文を刊行できたことや、香取神宮所蔵海獣葡萄鏡の調査研究の過程で、同鏡が成分分析の結果唐鏡と確定されたことなどは、ことに重要な成果といえよう。

また研究組織として、或いは研究体制を構成する各人が本研究と関連して行ってきた調査研究の成果は、3年間の期間内に刊行した『奈良時代の塑造神将像』などの書物や展覧会図録、各種研究発表や論文等にも反映されている。またこの間の展示活動のうち、こ

とに最終年度に行った『大遣唐使展』、『仏像修理 100 年展』、『第六二回 正倉院展』は本研究との関わりが深く、『大遣唐使展』の場合、その内容に成果の一端が盛り込まれただけでなく、同展への出陳品（香取神宮蔵海獣葡萄鏡、及び藤井有鄰館蔵南詔図伝）が調査研究対象となって、最終的な報告書に結実した点が特筆される。展示→研究→展示という博物館特有の業務サイクルの中で学術的に価値の高い成果を生み出す、というモデルを示すことが出来た点においても、本研究は大きな成功をおさめたといえる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 8 件）

- ①稲本 泰生、二月堂本尊光背図像と観音の神変、ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集第八号「論集 東大寺二月堂—修二会の伝統とその思想」（法蔵館刊）、査読無、2010、49-70
- ②吉澤 悟、二つの「海獣葡萄鏡」、特別展図録「第 62 回 正倉院展」（奈良国立博物館刊）、査読無、2010、142-144
- ③谷口 耕生、聖地寧波をめぐる信仰と美術、特別展図録「聖地寧波—日本仏教 1300 年の源流」（奈良国立博物館刊）、査読無、2009、6-16
- ④岩田 茂樹、法隆寺金堂四天王像の諸問題、特別展図録「国宝 法隆寺金堂展」（奈良国立博物館刊）、査読無、2008、48-58

〔学会発表〕（計 10 件）

- ①北澤 菜月、「高麗と同時期の日本仏画について—高麗仏画と共通する図像をもつ作品を中心に」、国際シンポジウム『東アジア仏教絵画と高麗仏画 (Goryeo Buddhist Paintings in the Context of East Asia)』、2010 年 10 月 28 日、韓国国立中央博物館
- ②内藤 栄、工芸技法からみた国産宝物の特徴、正倉院学術シンポジウム 2010「正倉院宝物はどこで作られたか」、2010 年 10 月 24 日、奈良県文化会館
- ③吉澤 悟、遣唐使のもたらした技術—三彩を中心として、国際学術シンポジウム「東アジアの造形芸術と遣唐使の時代」、2010 年 6 月 5 日、奈良国立博物館講堂
- ④鈴木 喜博、檀像の請来と日本的展開、国際学術シンポジウム「東アジアの造形芸術

と遣唐使の時代」、2010 年 6 月 5 日、奈良国立博物館講堂

- ⑤稲本 泰生、二月堂本尊光背図像と観音の神変、第 8 回 ザ・グレイトブッダ・シンポジウム「東大寺二月堂—修二会の伝統とその思想」、2009 年 12 月 20 日、奈良教育大学講堂
- ⑥野尻 忠、孝謙天皇と正倉院宝物、正倉院学術シンポジウム 2009「皇室と正倉院宝物」、2009 年 10 月 31 日、奈良県新公会堂
- ⑦清水 健、奈良朝の宮廷生活、正倉院学術シンポジウム 2009「皇室と正倉院宝物」、2009 年 10 月 31 日、奈良県新公会堂
- ⑧谷口 耕生、ボストン美術館所蔵 釈迦靈鷲山説法図（法華堂根本曼荼羅）をめぐる、第七回 ザ・グレイトブッダ・シンポジウム「東大寺法華堂の創建と教学」、2008 年 12 月 21 日、奈良教育大学講堂

〔図書〕（計 6 件）

- ①奈良国立博物館、奈良国立博物館、奈良時代の仏教美術と東アジアの文化交流（研究成果報告書、2 分冊）、2011、430
- ②奈良国立博物館、中央公論美術出版、奈良時代の塑造神将像、2010、170
- ③奈良国立博物館、奈良国立博物館、特別展図録『仏像修理 100 年』、2010、144
- ④奈良国立博物館、奈良国立博物館、特別展図録「平城遷都 1300 年記念 大遣唐使展」、2010、392
- ⑤奈良国立博物館 編、思文閣出版、正倉院宝物に学ぶ、2008、424

6. 研究組織

(1) 研究代表者

湯山 賢一 (YUYAMA KENICHI)
奈良国立博物館・館長
研究者番号：00300690

(2) 研究分担者

西山 厚 (NISHIYAMA ATSUSHI)
奈良国立博物館・学芸部長
研究者番号：10167570
鈴木 喜博 (SUZUKI YOSHIHIRO)
奈良国立博物館・学芸部 首席研究員
研究者番号：30416408
岩田 茂樹 (IWATA SHIGEKI)
奈良国立博物館・学芸部 美術室長
研究者番号：20321622
内藤 栄 (NAITO SAKAE)
奈良国立博物館・学芸部 工芸考古室長
研究者番号：40290928
稲本 泰生 (INAMOTO YASUO)
奈良国立博物館・学芸部 企画室長
研究者番号：70252509
吉澤 悟 (YOSHIKAWA SATORU)

奈良国立博物館・学芸部教育室長
研究者番号：50393369
宮崎 幹子 (MIYAZAKI MOTOKO)
奈良国立博物館・学芸部資料室長
研究者番号：50290929
谷口 耕生 (TANIGUCHI KOSEI)
奈良国立博物館・学芸部保存修理指導室長
研究者番号：80343002
野尻 忠 (NOJIRI TADASHI)
奈良国立博物館・学芸部主任研究員
研究者番号：10372179
清水 健 (SHIMIZU KEN)
奈良国立博物館・学芸部研究員
研究者番号：80393370
岩戸 晶子 (IWATO AKIKO)
奈良国立博物館・学芸部研究員
研究者番号：50359444
齋木 涼子 (SAIKI RYOKO)
奈良国立博物館・学芸部研究員
研究者番号：90530634
北澤 菜月 (KITAZAWA NATSUKI)
奈良国立博物館・学芸部研究員
研究者番号：10545700
永井 洋之 (NAGAI HIROYUKI)
奈良国立博物館
学芸部アソシエイトフェロー
(H20.4-H21.3：学芸部研究員)
研究者番号：20466303
中島 博 (NAKASHIMA HIROSHI)
奈良国立博物館・名誉館員
研究者番号：40198073
(H21→H22：研究協力者)

(3) 連携研究者

有賀 祥隆 (ARIGA YOSHITAKA)
東京藝術大学・客員教授
研究者番号：20133613
前園 実知雄 (MAEZONO MICHIO)
奈良芸術短期大学・教授
研究者番号：00250358
東野 治之 (TONO HARUYUKI)
奈良大学・教授
研究者番号：80000496
根立 研介 (NEDACHI KENSUKE)
京都大学・教授
研究者番号：10303794
藤岡 穰 (FUJIOKA MINORU)
大阪大学・教授
研究者番号：70314341
高橋 照彦 (TAKAHASHI TERUHIKO)
大阪大学・准教授
研究者番号：10249906

(4) 研究協力者

山崎 隆之 (YAMAZAKI TAKAYUKI)
愛知県立芸術大学・名誉教授
研究者番号：60015279
梶谷 亮治 (KAJITANI RYOJI)
東大寺ミュージアム・館長
研究者番号：40152649
杉本 一樹 (SUGIMOTO KAZUKI)
宮内庁正倉院事務所・所長
成瀬 正和 (NARUSE MASAKAZU)
宮内庁正倉院事務所・保存課長
尾形 充彦 (OGATA ATSUHIKO)
宮内庁正倉院事務所・整理室長
西川 明彦 (NISHIKAWA AKIHIKO)
宮内庁正倉院事務所・調査室長
森實 久美子 (MORIZANE KUMIKO)
九州国立博物館・学芸部研究員
研究者番号：70567031
原 瑛莉子 (HARA ERIKO)
研究者番号：90593129
奈良国立博物館・
学芸部アソシエイトフェロー